

かぐらおが

第 21 号

昭和54年12月1日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は山田守英学長)



神居古潭

内 容

山に登る.....海野 徳二... 2	講義実習棟の増改築について..... 6
背中の短刀.....牧野 幹男... 3	解剖体追悼法要..... 7
第26回北海道地区大学体育大会..... 4	体育大会..... 7
第22回東日本医科学生総合体育大会..... 4	路上駐車について..... 7
第4回旭川医科大学医学教育ワークショップ..... 5	研究室紹介.....重川 宗一... 7
テニス講習会..... 6	課外活動短信..... 8
スキーの貸し出しについて..... 6	窓 外.....保坂 明郎... 8



山に登る

海野徳二

私は旭川に住むようになってから、年に一度は山に登る。大雪山系の眺めが教室の窓から良く見えて、四季を通じての美しさに魅せられたせいもあるが、体力テストのつもりもある。学生時代から比べると十キロ以上も肥ってしまったのだから、いわばいつでも荷物を担いでいるような状態にある。平地を歩いている時はたいしたことはないのだが、体重を垂直方向に移動すると息が切れる。つまり、階段とか坂道とかは大の苦手、山に登ることは絶好の体力テストになるわけである。とに角、やっとの思いで頂上に辿り着いた時は、今年も何とか登って来られたという喜びで一ぱいになる。

山に登る時は当然のことながら一步一步歩いて行く。息が切れても疲れても誰かが自分の代わりに歩いてくれるわけにはいかない。せいぜい荷物を持ってくれる位で、体重まで分担して貰うことは出さないから、たかが知れている。薬をして休んでいればいつまでたっても頂上に達することは出ない。どうしても自分でやらねばならないことが分り切っている所が好きだ。

現代は何事につけても人に頼り過ぎるような気がしてならない。どうしろこうしろと要求ばかりしていて、自分では何もしない人は一回山に登ってみれば良いと思う。自分でやらねばならないことがはっきり分るから。

患者と医者との関係も同じようである。一步一步努力して病気を治していくのは患者自身であって、医者は早く頂上に到達できるようにと、荷物を持ってやったり、こちを通った方がよいとアドバイスしてやったり、山道の岩をどけてやったりしているに過ぎない。医者に病気を治して貰ったのでもなければ、医者が病気を治してやったのでもないのだ。

この辺の所を患者も医者も誤解している場合が少なくないようである。医者が治してくれるものだと思っているから、勝手気儘な生活をしながら治せ治せという。良くならないのは医者が一生懸命やらないからで、現在の医療制度に問題があるのだと言って、より良い医療をと要求する。医療制度に問題があるのも事実だが、それだけを論じていて万事が旨いくわけではない。

医者の方でもあの患者を治したのは自分だと思っている。そう思っているから患者からの訴えに対して次から次へと投薬する。当大学附属病院では一患者一カルテ制であるから心配ないのだが、足の痛いのは整形外科、頭の痛いのは内科、のどが痛いのは耳鼻科というように各科をかけ持ちで廻ってくると、薬が買物籠一杯の量にも

なるという。患者の方でもどこか痛いのを治してくれるのはどの科の医者ときめてかかっているから、他科からの投薬については一言も喋ろうとはしない。急性中耳炎は風邪の一部のようなものであるのに、風邪は小児科、中耳炎は耳鼻科と決めてかかると、小児科と耳鼻科から同じ薬を二重に貰ってしまうことにもなる。

癌の手術について考えてみよう。手術をうけるために入院する期間でさえも、病気が発見されてから社会復帰出来るようになる期間に比べれば短いのに、まして手術そのものは全体のごく一部分に過ぎない。手術の術者が立役者のように見られるのは何とも頷けない話である。術者は腫瘍組織を切除するというお手伝いをしていただけである。入院は道に迷うことが無いように道標を立てておいたり、案内人がついている期間である。治って社会復帰していくのは、あくまで患者自身の意志と努力による。

最近では病院の老人ホーム化という話も聞く。先日あった事だが老人の急性中耳炎を入院して治療させたいと家族に申し出られて驚いたことがある。家が遠くで不便だから付き添って通わせられないという。何処ですかと尋ねたら東光だという。治療は通院で、休養は家庭でと話したら来なくなった。入院治療を承知してくれた病院に行ったのだろう。老人自身も病気は医者が治すもので、看護は看護婦のやることだから、入院して治療することに全く疑問を抱かないし、家族は家族で完全看護の病院ができて手間が省けたと思っている。欧米では既に叫ばれていることだが、家族から看護する喜びを奪ってはならないなどという高尚なことは、現在の日本の社会では所詮無理なようだ。

こんなことを考えながら一步一步登って行く。普通の人の何倍も休みをとりながら。

今年の夏は教室の人や看護婦さん達にも参加して貰って、黒岳・旭岳の縦走を計画した。黒岳を登ったところで台風の影響により中止せざるを得なかったのは何とも残念であった。来年の夏には是非実現させたいものだと思っている。皆さんも参加されませんか。

(耳鼻咽喉科学講座 教授)



背中の短刀

牧野 幹 男

1960年の夏のある早朝、私は米国のある病院の地下1階にある死体安置室に立っていた。側には黒人のオーダリー（雑役夫）ジョー・スミスがおり、彼は1つ1つの冷蔵庫の扉を開け、私は死体と夜勤婦長室からの名簿の照合を始めた。その日、病理部の当番である私は、他のレジデントなどの分担を決め、仕事の段取をするのが朝の第1の役目であった。

3 屍体の確認を終った後で、第4の冷蔵庫の扉に名前のない名札がついているのを不審に思い、ジョーに扉を開けるよう目で合図した。ジョーが台を引き出し白布を取除いた。そこには熊のように逞しい体格の黒人の屍体がうつむきに横たわっていた。背中には巾広いガーゼがテープでとめられており、その端から1筋2筋のどす黒い血が流れていた。屍体の側のガーゼの包みの中には、長さ30cmほどの、柄に同様に黒い血糊のついた短刀が置かれていた。「何だいこれは!!」私はびっくりして言った。「さっき夜勤婦長室で聞いたDOA(Death on Arrival)だと思うよ、ドック。」ジョーは続けた。「真夜中に黒人どうして喧嘩があり、1人が短刀で背中を刺されて、病院に担ぎ込まれたんだって。着いた時はもう死んでいたさうだよ。」

台を押し戻し重い扉を閉めながら、呻くような声でジョーは言った。「黒人というのはとんでもない奴等だよ、ドック。夜中に酒をのんで喧嘩をし、そのあげくこのさまだ。全くあきれた連中だよ。」

私はしばらくあっけにとられて、ジョーの顔を見つめていた。「しかしなあ、ジョー。この国の歴史は200年だそうだが、黒人はその間ひどい目に遭って来たんじゃないのか?教育や仕事のチャンスなくて、黒人だけを責めるわけにはいかないじゃないか?」

今度はジョーが私の顔をまじまじと見る番だ。しばらくの沈黙の後で、「ヤアーさうだよドック。今にさ、今にこの国に共産主義者がやって来て、こんな問題などないようにしてくれるさ、きっと!」

私は再び驚いて、黒人としては小柄ではあるが、カモシカのような柔軟な肉体をもつジョーが、躍るような手振りですすのを聞いていた。(そうか、この国の下層階級の黒人一般は、そんな風に考えているのか?)

× × × × ×

それから20年経った。その間、あの国で共産主義者が、問題をすっかり解決してしまったと言う話はまだ聞いていない。その後私はいろいろな国での体験や見聞を通じ

て、人間が人間を差別するのは、人間の本性に根ざした底深いものであり、人種差別はそのもっとも端的な表現であり、たとえば、米国での黒人はみじめであるが、心ある白人も同様に不安で哀れな存在であることをようやく学ぶことができた。単一民族性を誇り、米国々民のように長い年月の間の訓練が全くできていない日本人は、我々が想像する以上に、人種差別の民族ではないのだろうか? そういえば、最低の人種差別の国は日本であることを裏書きするような事件が、過去にも現在にも数多くあったのではないだろうか?

最近のベトナム難民問題に対する日本政府や日本人の対応の仕方ほど、海外における日本の評価を低落させたものはないようである。日本に17年在留しているというニューズウィーク誌東京支局長のB・クリッシャー氏は、ある雑誌の中で次のように書いている。

「日本が国際社会で何か大きな役割を果たすのは土台無理だとする、たぶん最も強い論拠は、——日本人の性格そのものに根ざしており、それは要するに、民族的優越思想と、折にふれて顔をのぞかせる外国人嫌いの2つである。日本はその社会を、おそらく他のどの国もかなわないほど巧みに管理しているが、それは大リーグ(国際社会での)の仲間入りとはややちぐはぐな閉鎖社会である。実際、私はごく最近まで、日本人のこの側面を本当には知らないでいた。卒直に言って17年間うっかりしていたのだが、インドシナのボード・ピープル(海上難民)に対する最近の日本の態度ほど、私をして、愛するこの国に失望を抱かせたものはなく、日本についての悪い印象が突如、何から何まで甦ってきたのであった。」

「もし日本が批判をかわすために金を出すことだけを考えているのだとしたら、それは賢明な金の使い方ではないと思う。人は何もかも金で買えるわけではなく、とりわけイメージは金では買えない。」

我々は、好むと好まざるとに拘わらず、どのような分野でも国際社会で役割を果たすよう義務づけられている。そのような行動をとろうとする時、心の奥底にひそんでいる人間差別や人種差別は、我々日本人の背中に突きつけられた短刀なのだと思わざるをえない。

(検査部 教授)

第26回 北海道地区大学体育大会



第26回北海道地区大学体育大会は、北海道大学が当番校となり、7月14日(土)から7月16日(月)までの3日間にわたり、全道43大学約4,700名が参加して札幌・江別市内の各競技場で行われた。本学からは11種目に166名が参加した。

じりじりと暑くなったかと思うと、肌寒い風が吹いたりという気まぐれな天気の中で、選手達は善戦健闘した。

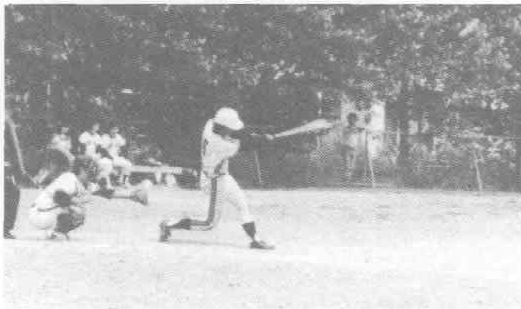
陸上競技は、2年の小黒恵司君が、110mハードル・三段跳でそれぞれ2位、谷井廣樹君が砲丸投げで4位となった。

弓道は、女子個人戦で4年の高橋真理子さんが2位。

剣道は、男子個人戦で2年の原隆志君がベスト8入りした。

準硬式野球は、並いる強豪チームを次々と下し決勝戦で教育大釧路分校と対戦し4対3で惜しくも敗れ準優勝に終わった。

各種目(団体戦)の成績は次のとおり。



準硬式野球	2回戦	旭医大	10-0	札商大
			(6回コールド)	
	準々決勝	旭医大	3-2	道都短
	準決勝	旭医大	4-0	駒沢大
	決勝戦	釧教大	4-3	旭医大
軟式庭球	1回戦	旭医大	不戦勝	釧教大
	2回戦	樽商大	4-1	旭医大
バスケットボール	1回戦	旭医大	不戦勝	道都短
	2回戦	旭教大	99-77	旭医大
バレーボール	1回戦	函教大	2-0	旭医大
サッカー	1回戦	道工大	3-1	旭医大
卓球(男)	(予選)	北大	3-1	旭医大
		旭医大	3-2	北星園

※決勝トーナメント進出 北大

(女) (予選) 樽商大 3-0 旭医大
旭医大 3-1 文女大

※決勝トーナメント進出 樽商大

バドミントン 1回戦 旭医大 3-2 道都短
2回戦 札商大 3-0 旭医大



柔道 1回戦 旭川大 4-1 旭医大
剣道 (予選) 岩教大 3-2 旭医大
旭医大 3-1 東日大

※決勝トーナメント進出 岩教大



弓道(男子) 13大学中、8位
(女子) 7大学中、4位

(学生課)

第22回東日本医科学生 総合体育大会

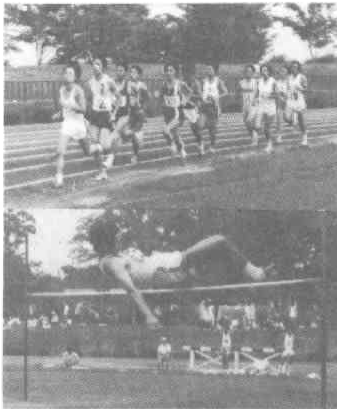


陸上部旭医旋風
巻き起こす!!

7.20~31

第22回東日本医科学生総合体育大会(夏季大会)は、東京大学医学部が主管校となり7月20日(金)~31日(木)までの12日間にわたり、東日本の医科(医学部)大学、34大学約9,900名が参加して、東京都内の各競技場で熱戦を繰り広げた。

本学からは、16種目に215名が参加、総合成績で34大学中19位と善戦健闘した。戦績等は次のとおり。

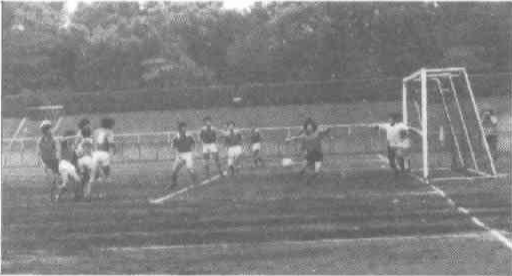


陸上競技は、1年山本長史君が1,500m優勝・800m 2位、2年小黒恵司君が三段跳優勝・110mハードル2位・走高跳3位、4年稲尾茂則君が円盤投3位と活躍、トラック・フィールド競技総合で3位となり、旭医旋風を巻き起こした。

準硬式野球 2回戦 旭医大 0-12 東北大
硬式庭球(男)は準々決勝で弘前大に3-4で敗れベスト8となった。

2回戦 旭医大 5(W₃S₂WO₂)2東海大
3回戦 旭医大 4(W₂S₂W₁)3埼玉大
準々決勝 旭医大 3(W₁S₃W₁)4弘前大
(女)2回戦 旭医大 1(W₀S₁W₁)2北大

サッカーは準々決勝で千葉大と対戦1-1のタイとなりPK合戦の末1-3で敗れベスト8となった。



1回戦 旭医大3-1埼玉大 準々決勝
2回戦 旭医大3-1帝京大 旭医大(1PK3)千葉大

バスケットボールは、準決勝へ進出、北大と対戦したが60-83、3位決定戦で日大と対戦71-89で敗れ、惜しくも4位に終わった。

3回戦 旭医大78-32昭和大 準決勝
4回戦 旭医大80-69新潟大 旭医大60-83北大
準々決勝旭医大72-62岩手大 3・4位決定戦
旭医大71-89日大

バレーボール(予選リーグ)旭医大2-0 順天堂大
旭医大2-0 福島大 旭医大2-0 慶応
(決勝トーナメント)1回戦 旭医大1-2 山形大

卓球は、個人戦男子シングルスで6年西野茂夫君がベスト32、女子シングルスで3年野原晶恵さんがベスト16、男子ダブルスで西野・森本(5年)組がベスト16に進出した。



団体戦は予選リーグ男子4位、女子5位で不通過。



柔道は、個人戦軽量級で6年の小池能宣君が3位となった。団体戦決勝トーナメント旭医大1-2日大
剣道 団体戦予選リーグ不通過
空手道 1回戦旭医大2-1群馬大

2回戦 旭医大 0-1 信州大

弓道は、団体戦120射57中で4位、個人(女子)では4年の高橋真理子さんが優勝と射技優秀賞を獲得した。

バドミントン、個人戦男子シングルスで4年山崎左雪君がベスト8、男子ダブルスで山崎・小原(5年)組が4位となった。

男子団体戦	女子団体戦
1回戦旭医大3-0順天堂	2回戦旭医大2-0日医大
2回戦旭医大0-3新潟大	準々決勝旭医大0-2山形大

(学生課)

第4回旭川医科大学医学教育ワークショップ

本学医学教育ワークショップは、昭和50年から教育課程の充実と適切な医学教育の効果を期すためこれまで3回にわたり実施してきた。

今年は去る8月1日(木)本学会議室を会場に午前9時から午後5時30分まで、学長はじめ教員、研修医、大学院生等38名が参加し、次の主題・目的で実施された。

主題：初年度学習上の諸問題

目的：単科医科大学において、入学初年度に留意すべき教育学習上の主要問題点を明らかにし、その解決法について討議する。



今回のワークショップには、講師として大阪大学医学部助教授中川米造氏をお招きし助言・指導をお願いした。又、参加者の中には、本学初の卒業生6名が加わり、一段と熱の入った討議が行われた。

今までのワークショップを通じて得られた成果は、今後の本学における教育等に大いに役立つものと期待される。

(学生課)

テニス講習会

10月20日(土)・21日(日)の2日間にわたり葛岡威氏(昭和54年国民体育大会成年女子監督)ら6人の講師を迎えテニス講習会が実施された。20日は第5セミナー室において午後5時から7時30分まで講義、21日には午前10時にテニスコートに集合したが雨のため体育館に移動して、午後3時20分まで技術指導が行われた。

両日合わせてのべ75名が受講し内容の充実した有意義な講習会となった。

なお、次のとおり受講生から感想が寄せられた。



(学生課)

—テニス講習会を終えて—

実技指導の21日は雨のため残念ながらグラウンドストロークは出来ず体育館にてボレー、スマッシュを中心に指導が行われました。講師のプレーを見ていると自分もそのつもりになるのですが、そううまくゆかず、スマッシュなど直されてから空ぶりばかりの始末。ダブルスの模範試合は打球の速さ、コントロール、ボレーのうまさ等やはり国体ベスト4の実力に感心させられました。これからはもう少し早い時期にやってもらえたらテニス上達

にさらに役立つと思われます。(T・T)

あいにくの天気で、グラウンドストロークが出来なかったのが残念であったが、いつもやっていると見すごしがちな基本技術を再認識できたのは大変ためになった。是非ともこういう企画をもっと行ってほしい。(I・O)

我々がテニスをしていて最も困ることは、しっかりしたコーチがいないことである。今度のテニス講習会はこれを補うために非常に意義のあったものだと思う。今後このような講習会が数多く開催されることを望んでやまない。(K・N)

今回の講習会は、テニスの基本を理解し、身につける上で非常に有益なものだった。国体選手のテニスに対する情熱に触れたことで、テニスとはどういうものか、どのようなものをめざすかを知ることができた。(K・H)

今回の講習会では、指導していただいた方々のテニスに対する真摯な態度を学びました。又短時間であったにもかかわらず、懇切丁寧な指導、印象深いわかりやすい言葉での説明により各人がテニスの基本技術を確実に吸収し、大いに成果がみられました。直接見る国体選手の模範試合にも感激しました。今後このような講習会が定期的開催されることを望みます。(H・S)

(硬式陸球部)

スキーの貸し出しについて

本学では学生諸君の課外活動用として、スキー65台、歩くスキー40台を用意し、12月1日から3月中旬まで貸し出しを行っている。利用する者は貸し出し日の2週間前から予約受け付けをするので、早目に申し込むこと。

(学生課)

講義実習棟の増改築について

本年4月1月付けで、本学医学科の入学定員が改訂され、20名増になったことに伴い講義実習棟の一部が増改築されましたのでお知らせします。なお、工事の概略及び平面図は次のとおりです。

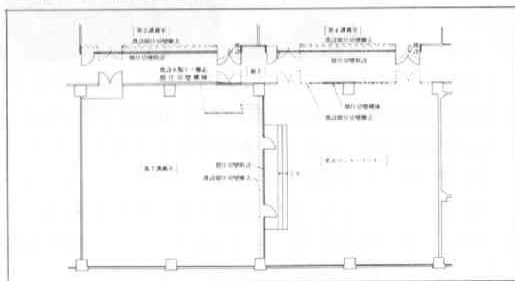
1. 講義実習棟2階の改築

- 1) 従来の第8講義室を模様替えし、第1学年から第3学年学生の更衣ロッカーを配置。
- 2) 第3・4講義室の拡充
- 3) 第7講義室内の座席数を増設(12月完成予定)

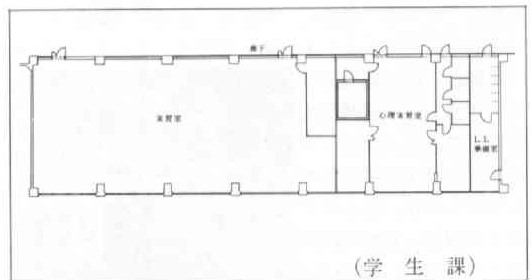
2. 講義実習棟4階の増築(12月完成予定)

- 1) LL室の拡充
- 2) 実習室及び心理実習室の増設

〔講義実習棟2階平面図〕 (関係分)



〔講義実習棟4階平面図〕 (関係分)



(学生課)

解剖体追悼法要

昭和54年度旭川医科大学解剖体追悼法要は、9月26日(水)午後2時から東本願寺旭川別院において行われた。本年度の法要は昭和53年9月1日以降昭和54年8月31日までの間に医学発展のために尊い遺体を提供された120体を対象とし、来賓・遺族100名、本学関係者60名、学生100名の参列のもと、厳かに御霊が供養された。

また、法要終了後、近文墓地内にある納骨堂では御遺族をはじめ70名が参拝した。(学生課)



体育大会

9月12日(水)、学生・教職員のべ400名の参加により、体育大会が行われた。当日は青空の広がるスポーツ日和とあって、グラウンドではサッカー・ソフトボールの各参加チームが汗を流しながらの得点争いとなった。一方体育館ではバレーボールの熱戦が続き盛んな声援が送られていた。成績は次のとおり。サッカー 1位4年チーム 2位2B ソフトボール 1位メジャーチーム 2位バカボンズスペシャル バレーボール 1位職員チーム 2位4年

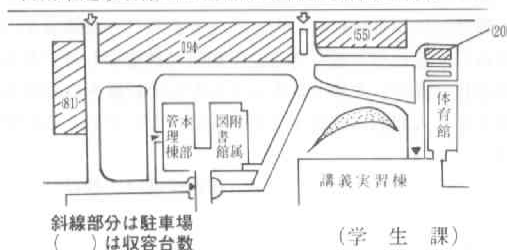
(学生課)

路上駐車について

大学構内における路上駐車については、再三注意を呼びかけているが、依然として少数の者の路上駐車が続いている。駐車場への駐車が十分可能な状態でありながら、このような行為が見られることは非常に残念である。

言うまでもなく、路上駐車は、通行の障害となるばかりでなく事故の危険が増大し、更に積雪期を迎え除雪作業の妨げにもなる。

自動車通学者諸君の良識ある自主規制を望む。



斜線部分は駐車場
()は収容台数

(学生課)

研究室紹介

■ 生化学第二講座 ■

重川 宗一

我々の研究室は、金沢教授、高桑、桑山両助手、片波見研究生、事務官松村さん、助教授重川の6人のメンバーから構成されている。創設されたのが、昭和52年末なので大変新しい教室であるが、約2年たった現在、一応、教育及び研究の態勢はほぼ整ったと言えよう。研究室の仕事のテーマは、筋細胞膜系に存在するカルシウムポンプの作用メカニズムを分子レベルで明らかにすることである。材料として、ウサギ骨格筋から調製した筋小胞体標品、モルモット心室筋から調製した細胞形質膜標品を主として用いている。これらのカルシウム輸送系は、ATPを分解し、その際放出される化学エネルギーを利用して、濃度勾配に逆ったカルシウムイオンの輸送を行う能動輸送系である。筋小胞体によるカルシウム輸送及びそれに共役するATP分解反応の研究は、過去約20年の長い研究の歴史をもち、研究者の数の多い大変競争の激しい分野である。我々の研究室が、新設であるというハンディキャップにもめげず、金沢教授以下によって、現在すでに、この分野をリードする重要な発見がなされ、又なされつつあるのは大変喜ばしいことである。心筋細胞形質膜のカルシウムポンプの研究は、この研究室では、今年4月から始めたものであるが、この分野自体も歴史が浅い。これまで、この分野では、不十分な研究しかなされていなかったのも、この研究室での仕事の成果が期待される。

ところで、我々の研究室は、臨床研究棟の最上階にある。8階からの周囲の風景は、抜群の美しさで、この研究室を訪れる人々によって、おほめの言葉をいただくことが多い。エレベーターのおかげで、8階とてあまり不便も感じられず(?)、研究室が8階にあるという幸運を大変感謝している。

研究室のメンバーについて言えば、現在、2人のみが独身である。しかし、このうちの1人が12月に結婚する予定なので、最後の1人は貴重品となろう。研究室のメンバーで変わった点と言えば、メンバーが種々のbackgroundをもっていることであろうか。金沢教授は、医学部生理大学院を出られたあと長らく理学部生物で生体膜のイオンポンプの研究に従事されてこられた。又、我々には内科出身者が3人もいる。後者の点について言えば、アメリカでは、比較的多数の人々が臨床と基礎と両方を行っているようであるけれども、日本では数多くはないと聞く。病態生理、病態生化学的研究には、比較的に長い両者の経験が有用であろうから、そういう意味で、我々の研究室のこれらの人々は、ユニークであると言えるかもしれない。

(生化学第二講座 助教授)

課外活動短信

ラグビー部

％ 旭川ラグビー協会会長杯争奪戦 優勝
％～％道央選手権 優勝

卓球部

5月道医体 Aリーグ優勝、Bリーグ準優勝

陸上競技部

％ 加盟団旭川支部大会 山本毅1,500m 1位
％～％春季全道学生選手権 山本毅1,500m 1位 800m 2位
小黒嶋三段跳 1位、走高跳 4位、110m H 6位
％ 秋季全道学生選手権 山本毅1,500m 1位 800m 1位
小黒嶋三段跳 2位

バドミントン部

％～％第3回北海道医科学生バドミントン大会
(男子) 団体戦 2位
個人戦シングルス 山崎佑 1位 小原敦 3位
ダブルス 小原敦・山崎佑 2位 棚沢・長谷 3位
(女子) 団体戦 1位
個人戦ダブルス 中野・寺田(小杉) 1位
男子新人戦シングルス・ダブルスとも3位まで独占

バスケットボール部

％ 北医体 3位
％～％旭川夜間バスケットボール大会 優勝

サッカー部

％～％旭川社会人リーグ 準優勝
％～％旭川学生リーグ 優勝 インカレ道北代表
％～％インカレ全道 ベスト 8

山岳部

％～％春山合宿 富良野岳 ⅔～⅔夏山合宿 トムラウシ、その他知床遠征、大雪山、十勝岳、美瑛岳等山行多数

アーチェリークラブ

％ 新人戦 6位、7位

医療研究会

％～％幌加内にて合宿
％～％大学祭にて「地域医療」発表会
％ 医ゼミにて「農村医療」分科会担当
％～％幌加内にてフィールドワーク(家庭訪問、検診、座談会)

世界旅行研究会 "Vagabond"

％～％大学祭参加 出国会員 6名

怒外



保坂明郎

— 経験ということ —

医学生になりたての頃、子供の時分からのかかりつけの内科医にこう言われた。「君も医者になるなら泥棒以外のことは何でもやるつもりになるといいよ。」未だ10台の私は、このお祝いとしては変な言葉に戸惑い、撫然としたものである。年がたつにつれて、これが臨床医としての心構えを、あの先生流に教えてくれたものであることがわかるようになった。実際、患者の訴えはもちろん、その心理状態まで理解するには、医師は知識だけでなく、出来れば幅広い人生経験を持つことが必要と思われる。

人間というのは浅はかなもので、自分が体験しないことは、なかなか本当の意味では理解出来ないものである。早い話が優等生には留年学生の挫折感はおからないし、失恋したことのない者には、あの絶望感は不可思議に思われるだろう。どんな経験でも、特にそれがつらいことであつたり悲しいことであれば、それに打ち克ち、それを乗り越えようとする努力の中に経験が積まれ、物事の

本質が理解され、人間性が向上される。

ただし、あらゆることを理解するのに経験が必要だということになれば、一生かかっても不可能である。幸い人間には同感するという能力がある。激しい腹痛で苦しむ人を見て、その苦しみをそのまま経験することは出来なくても、何時か指先を一寸切った時の痛みを思い出して、それを拡大してみれば患者の苦しみに近づくことは出来る。また友人の悩みを聞き、それに対する解決策と一緒に考えている過程で、友人の悩みを恰も自分の悩みであるかのように共感することは出来る。

自分自身の経験には限りがあるから、医師を志す者は進んで機会を捕えて経験を豊かにすると同時に、他人の経験をも自分のものとするという一種の貪欲さが必要であろうと思う。よく言われるように、医師は病気をなおすのではなく、患者をなおすものであるから、患者の身になって感じ、患者の身になって考えるという態度が根本的に要求される。そのためには自分の年令とともに蓄積される経験を漫然と待つてはいられないのである。

20才前後の人生の中で最も輝かしい6年間—そういう実感はないかも知れないが、そうであることは確実なのである—をともに過ごすことが如何に貴重なものであるかを肝に銘じ、未熟ではあっても互いの経験を自分のものとして人間的に成長する努力を忘れないで欲しいと思う。

(眼科学講座 教授)